

# フェミニスト方法論に関する文献レビューのまとめ

永山理穂

## 1. はじめに

本稿は、領域開拓プログラム「分野間比較を通じた質的研究アプローチの再検討」の一環として実施されたフェミニスト方法論に関する文献レビューのまとめである。本稿の目的は、これまで紹介してきたフェミニスト方法論に関する18の文献を整理し、その議論の要点および係争点を示すことである。以下では、まずフェミニスト方法論とはいかなる方法論であるのかを示し、その潮流を4つに整理する。そして、それぞれの方法論における論点を提示する。なお本稿では、方法論を「認識論的立場の違いに沿って、手法やリサーチ・デザインの活用についての理論的指針を提供するもの」(野村 2017: 2) とする。

## 2. フェミニスト方法論とは何か

フェミニスト哲学者であるSandra Hardingは、フェミニスト方法論の基盤となるフェミニスト認識論をはじめて体系的に整理して示した。彼女は、認識論(「知識に関する理論」)と方法論(「研究がどのように実行されるかについての理論」)と手法(「エビデンスを集めるための技法」)を区別し、認識論的な立場は、方法論と手法に影響を与えることを指摘した[レジュメ①]。以上の整理を踏まえてHardingは、フェミニスト認識論の立場を、フェミニスト経験主義、フェミニスト・スタンドポイント理論、フェミニスト・ポストモダニズムの3つに区分した(Harding 1986: 24-29)<sup>1</sup>。

フェミニスト認識論とは、ジェンダーと知の関係を考察する認識論の一形態である(Anderson 1995; Grasswick 2008)。ここでジェンダーは個人の属性としてではなく、社会関係の軸として理解される。そのさいフェミニストたちは「女性的な認識論 feminine epistemology」と「フェミニスト認識論 feminist epistemology」を区別し、前者を女性特有の知のあり方として、後者をジェンダーと知の権力関係を考察する認識論として定義した。フェミニスト認識論は、社会のジェンダー化された権力構造が、知識生産に関して行使されるエージェンシー agencyに対してどのような影響を及ぼすのかについて関心を寄せてきた[レジュメ⑦]<sup>2</sup>。

本稿は、Hardingの示したフェミニスト認識論の3つの区分にならいつつ、1990年代以降発展を遂げたインターセクショナリティ・アプローチを新たな潮流として加え、それぞれの方法論における論点を提示する。

---

<sup>1</sup> レジュメ①、⑦、⑪はこれら3つの立場を概説している。

<sup>2</sup> 構築主義パラダイムのエージェンシーは、近代の主客二元論を克服するために創り出された概念であり、完全に自由な「負荷なき主体」でもなく、完全に受動的な客体でもない、制約された条件のもとで行使される能動性を指す(上野ほか編 2018: 11)。

### 3. フェミニスト経験主義における論点——フェミニスト的な定量的研究はいかにして可能となるのか？

1980年代に萌芽したフェミニスト経験主義は、「科学的探究における既存の方法論的規範を厳密に遵守することによって、性差別や男性中心主義などの社会的偏見は矯正可能である」という立場をとる (Harding 1986: 24)。フェミニスト経験主義者は、自らが依拠する経験主義的な科学の方法論と価値自由という理念そのものは疑問視せず、研究における性差別的な偏見の混入を、そうした経験主義的規範にたいする「違反」としてとらえた。そして、そのような「違反」にたいしては、男性よりも女性科学者のほうがより敏感であるため、女性やフェミニストたちは、男性よりも客観的で偏見のない知識を産出する視点を持つとされる (二瓶 2020: 16-17)。

初期のフェミニスト経験主義者の多くは生物学や神経生理学を専門とする女性科学者であったが、近年は Helen Longino などのフェミニスト哲学者を中心に議論が展開されている。一方で、多くのフェミニスト研究者、特に社会学的なアプローチをとるフェミニスト研究者によって、定量的手法を主とするフェミニスト経験主義は忌避されてきた。なぜなら、フェミニストの方法論に関する議論は、伝統的な定量的研究に対する批判に端を発するためである。例えば W. B. E. DuBois は、「[定量的研究における] 伝統的な科学や理論では、文字通り女性を見ることはできない」(DuBois 1983: 110) と述べ、定量的研究における問題点を簡潔に提示している [レジュメ③]。そして、フェミニスト研究者による定量的研究に対する批判の多くは、定量的なデータ収集や分析のための方法論に対する全面的な拒絶へと横滑りしてしまっている [レジュメ④]。

以上の状況を踏まえた上でフェミニスト方法論を専門とする Joey Sprague は、定量的調査を実施する際のフェミニスト的な手法について論じた研究が事実上皆無に等しいことを問題として捉える。そこで、これまでフェミニストが提起した定量的手法に対する批評を検討した上で、フェミニストの定量的研究者が実施している戦略について考察し、フェミニスト的な定量的研究の可能性を提示している [レジュメ④]。

### 4. フェミニスト・スタンドポイント理論——「客観性」をいかに捉えるか？

フェミニスト経験主義の保持する経験主義的な規範そのものに批判を向けたのが、1980年代以降に盛り上がりを見せたフェミニスト・スタンドポイント理論である。代表的な論者としては、Sandra Harding、Dorothy Smith、Nancy Hartsock、Alison Jagger などが挙げられる。マルクス主義の影響を強く受けたこの方法論は、人々の置かれている社会的位置が、知識を生産する立場としての「スタンドポイント standpoint」を形成すると論じる。さらに、女性やマイノリティといった周縁的な社会的位置から生み出されるスタンドポイントは、他のグループのスタンドポイントよりも認知的に優れており、その意味で特権性を持つと理解される (二瓶 2021: 88)。すなわち、このアプローチにおいては、搾

取、抑圧、差別といった集合的な経験が、知識生産や政治的解放にとっての重要な資源に変容しうるものとしてとらえられる (Harding 2006=2009: 140)。

このようにスタンドポイント理論は、既存の科学観そのものを問題含みのものとして捉える。その際、フェミニスト経験主義においては保持されてきた「客観性」という概念が問い直されることになる。以下では、スタンドポイント理論において提示された2つの方向性を示す。

第一に、より良い「客観性」概念の構築を目指す方向性が示された[レジュメ⑩]。客観性についての議論において最も著名なフェミニスト理論家の一人である Harding (1995) は、実証主義における客観性と中立性の同一視が、政治の権力を隠蔽するために機能すると主張する。Harding は、この状況に対処する一つの方法として、「強い客観性 strong objectivity」の発展を要求する。「強い客観性」とは、Harding の造語である。Harding によると、従来の科学で想定されてきた価値中立性を要求する「客観性」は、研究者集団が保持している (しばしば支配集団の) 価値を相対化できていない点で、むしろ非常に「弱い」ものだという。それに対して、「価値自由」という呪縛から逃れ、周縁化された集団の立場から、中立性の名のもとに幅を利かせている支配的集団の価値や利害関心を認識するあり方の方が、「強い」客観性なのだという。そこでは知識の対象だけではなく、知識の主体が批判的考察に付されることになる (山森 2014: 37)。

第二に、客観性か相対主義かという二者択一的な前提そのものを問い直し、女性の経験に着目して妥当性を追求する方向性が示された[レジュメ⑩]。この方向性を説明するために、フェミニスト・スタンドポイント論者である Donna Haraway (1991) による「棒上りの比喩」の説明から始めたい。彼女は、ジェンダー化された社会生活に関する有効な知識を生み出だそうとするフェミニストの試みを、油を塗った棒に登るような極めて困難なものとして位置付ける。Haraway (1991) の比喩においてフェミニストは、科学へのコミットメントとして客観性を追求する一方で、相対主義的主張 (フェミニストが「発見」する「現実」および「真実」はすべて、特定の状況、文化、思考方法において社会的に構成されているという考え方) を手放すことができない。このような「客観性か相対主義か」という二項対立的なジレンマを乗り越えるために、フェミニスト・スタンドポイント論者は、マルクス主義の議論に依拠しながら自らの妥当性の基準を正当化することに主眼を置いた<sup>3</sup>。

---

<sup>3</sup> Karl Marx (1976) は、資本主義システムの「真実」について、既存の政治経済学者よりも「優れた」知識を生み出すことができると主張した。それは、彼が客観的であったからではなく、資本主義的生産システムの性質について「より良い物語」を語ったからである。彼は、労働者の生活の観察、労働者の搾取に関する理論、資本主義における利潤追求の必要性の間の関係性を概念化することに成功した。詳しくはレジュメ⑩を参照されたい。

## 5. フェミニスト・ポストモダニズム——女性の身体性をいかにして概念化できるか

フランスの思想家や哲学者を中心に発展を遂げたポストモダン思想は、知識生産およびジェンダーに関する考察を展開し、フェミニスト方法論に大きな影響を与えた。特に Judith Butler(1990)による *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity* (邦題:『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』) の登場以降、フェミニスト・ポストモダニズムは、フェミニスト方法論の主流となった。

フェミニスト・ポストモダニズムは、身体がどのように言説の中で生み出され、どのような結果をもたらすかを分析する上で有用であるが、身体的障害、加齢、性差や生殖に関する差異は、言説だけで完全に説明できる問題ではない[レジュメ⑥]。さらに、女性の従属は、身体の「意味」の問題であるだけでなく、実際の「身体的経験」の問題でもある。確かに、月経、出産、病気、高齢化、障がいに関する言説は、時代や文化によって異なり、これらの出来事がどのように経験され、定義され、規制され、評価されるかに影響を与える。このような点をフェミニスト・ポストモダニズムの視座から考察することは有用である。しかし、月経、出産、病気、高齢化、障がいは現に、その言説的構造の外に存在する身体的経験である。

このように、フェミニスト・ポストモダニズム以降、フェミニストたちは、社会生活が物質的な身体において営まれていることと、身体や感情が社会的に構築され文化的に可変であることの両方を認識する有用な方法を見出すのに苦心している。この難題に挑戦しているのが新唯物論に依拠するフェミニストたちである[レジュメ⑫]。新唯物論者は、物質や身体を、言語、文化、政治的な権力によって構成されるものとして捉えると同時に、それらを形成的 formative なものとして考えている。つまり、物質や身体は、それ自身の原動力や独特な種類のエージェンシーを持つものとして捉えられる。

新唯物論は、生物学に基づく本質主義的な性差別に対抗しようとしてきたフェミニストたちに対して警戒感を与えるものである。だが、新唯物論者が引き起こすのは本質主義の問題ではない。新唯物論者は、身体のエージェンシーが文化的権力の作用として理解される枠組み、すなわちエージェンシーに関する一方向的な説明(文化→身体)から、権力と身体が相互に作用し合う効果を持つ枠組み(文化⇄身体)へと、フェミニストの批判分析を転換することを目指している。そのなかで新唯物論者は、身体や生物学それ自体が自律的に作用することを強調する。さらに、文化か生物学のどちらかが身体を規定するという一方向的な因果関係のモデル(文化→身体 or 生物学→身体)を放棄し、代わりに因果関係を複雑で再帰的、かつ多重的に考えるモデルを採用する。すなわち新唯物主義が提起するのは、社会的・政治的現象に関する文化的・言説的分析を生物学的・物理的・化学的プロセスに関する科学的洞察をもって補完しようとする試みであり、学際的なフェミニスト研究において刺激のかつ挑発的な展開として捉えられるだろう。

## 6. インターセクショナリティ・アプローチ——インターセクショナリティはフェミニズムにユートピアをもたらすのか？

インターセクショナリティ・アプローチはブラック・フェミニズムに起源をもち、ポストコロニアリズムの主張にも呼応する形で発展を遂げてきた[レジュメ⑱]。このアプローチは、複数の社会的カテゴリーの交差によって生じる権力関係が、個々人の社会的立場や日常的経験にどのような影響を及ぼすのかを検討する。とりわけ人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、国籍、障害の有無、エスニシティ、年齢などの数々のカテゴリーを、相互に関係し、形成しあうものとしてとらえる点に特徴がある (Collins and Bilge 2020=2021: 16)。

その学術的起源としては、Kimberly Crenshaw (1989) の論文「周縁をマッピングする——インターセクショナリティ、アイデンティティ・ポリティクス、ウィメン・オブ・カラーにたいする暴力」が挙げられる。Crenshaw は、ジェンダーと人種が別々のカテゴリーとして扱われる結果、黒人女性がフェミニストと反人種主義者の両方の理論と政治において周縁化されてしまうという傾向に注意を促し、ジェンダーと人種の両方を考慮に入れ、それらの相互作用がいかにして黒人女性の経験を形成するのかに着目する必要があると主張した。

近年インターセクショナリティは、「あらゆる状況に対応可能なフレーズ catch-all phrase」(Phoenix and Pattynama 2006:187) として捉えられ、「絶対に触れるべき用語 a must」となっている (Schuster 2021: 25) [レジュメ⑩、⑬]。しかし、このようなインターセクショナリティの「すべてを包摂する」ような性質は、理論的な曖昧さによって保証されている (Knapp 2005) [レジュメ②、⑬]。

インターセクショナリティにおける理論的な曖昧さを批判的に検討してきたのが、フェミニスト・批判的実在論者である<sup>4</sup>。その体系的成果としては、Van Ingen ら (2020) による *Critical Realism, Feminism, and Gender: A Reader* が挙げられる [レジュメ⑧、⑨、⑮]。

---

<sup>4</sup> 1970年代後半にイギリスの哲学者 Roy Baskar が提唱した批判的実在論は、英語圏を中心に北欧や欧米諸国を中心として発展を遂げた方法論である。代表的な論者としては、Margaret Archer、Andrew Sayer、Berth Danermark、Tony Lowson らが挙げられる。批判的実在論は実証主義と同様に、現実の大部分は、それにたいする個々人の理解とは無関係に存在するという存在論的実在論に立脚する。一方で、いかなる主張も歴史的、地理的、社会的文脈の中で産出されるという認識論的相対主義を採用する点において、実証主義と一線を画す (Van Ingen et.al 2020: 10)。つまり批判的実在論は、存在論的実在論と認識論的相対主義を組み合わせることによって、認識対象の実在性と同時に認識主観の実在性を承認している点において独自性を有する (佐藤 2016: 86)。このような批判的実在論にフェミニストの知見を導入した方法論が、フェミニスト批判的実在論である。

本書の編者たちは、フェミニスト・ポストモダニズム以降の議論において、ジェンダーに関する構造的抑圧を指摘する論点が後景に退いている状況を批判的にとらえ、そうした状況を打破するために、「女性」というカテゴリーを擁護することを目指す。編者の一人である Lena Gunanrson は、インターセクショナリティをはじめとするフェミニスト・ポストモダニズム以降のフェミニスト理論において、「女性」というカテゴリーが、一枚岩的な「女性」像を呼び起こし、女性間の差異を隠蔽するものとして忌避されていることを指摘する。しかし、女性が女性であることによって、抑圧され、搾取され、差別され、排除されていることに着目する視点は、まさにフェミニスト理論の出発点であり、このような視点は、「女性」カテゴリーの擁護なしには成立し得ない。そこで Gunanrson は、「女性」カテゴリーを軽視するインターセクショナリティ・アプローチの背景に存在する概念的混乱を明らかにすることを通して、「女性」カテゴリーの擁護を試みている[レジュメ⑨]。

## 7. おわりに

本稿は、フェミニスト経験主義、フェミニスト・スタンドポイント理論、フェミニスト・ポストモダニズム、インターセクショナリティ・アプローチのそれぞれの立場の概要を示し、それぞれの立場における議論を概説してきた。本稿で示したフェミニスト方法論における多様性は、まさにフェミニズム理論の発展の軌跡であり、それぞれの方法論は独自の優れた点を有している。

## 【参考文献】

### レジュメを作成した文献

- ① Naples, Nancy A., and Barbara Gurr, 2014, "Feminist Empiricism and Standpoint Theory: Approaches to Understanding the Social World," Hesse-Biber, Sharlene Nagy eds., *Feminist Research Practice: A Primer*, Thousand Oaks: Sage Publications, 14-41.
- ② Davis, Kathy, 2008, "Intersectionality as Buzzword: A Sociology of Science Perspective on What Makes a Feminist Theory Successful," *Feminist Theory*, SAGE Publications, 9(1): 67-85.
- ③ Jayaratne, Toby Epstein and Abigail J. Stewart, 2008, "Quantitative and Qualitative Methods in the Social Sciences: Current Feminist Issues and Practical Strategies," Jaggar, Alison M.ed., *Just Methods: An Interdisciplinary Feminist Reader*, Routledge, 44-57.
- ④ Sprague, Joey, 2016, "How Feminist Count: Critical Strategies for Quantitative Methods," *Feminist Methodologies for Critical Researchers: Bridging Differences Second Edition*, Rowman and Littlefield Publishers, 95-143.
- ⑤ Sprague, Joey, 2016, "Qualitative Shifts: Feminist Strategies in Field Research and Interviewing," *Feminist Methodologies for Critical Researchers: Bridging Differences Second Edition*, Rowman and Littlefield Publishers, 145-193.
- ⑥ Ramazanoglu, Caroline and Janet Holland, 2002, "Escape from Epistemology? The Impact of Postmodern Thought on Feminist Methodology", *Feminist Methodology: Challenges and Choices*, SAGE Publications, 81-101.
- ⑦ Sprague, Joey, 2016, "Seeing through Science: Epistemologies," *Feminist Methodologies for Critical Researchers: Bridging Differences Second Edition*, Rowman and Littlefield Publishers, 33-62.
- ⑧ Gunnarsson, Lena, 2017, "Why We Keep Separating the 'Inseparable': Dialecticizing Intersectionality," *European Journal of Women's Studies*, 24(2): 114-127.
- ⑨ Gunnarsson, Lena, 2011, "A Defence of the Category 'Women'," *Feminist Theory*, 12(1): 23-37.
- ⑩ Carbin, Maria and Sara Edenheim, 2013, "The Intersectional Turn in Feminist Theory: A Dream of a Common Language?" *European Journal of Women's Studies*, 20(3): 233-248.
- ⑪ Brisolara, Sharon, 2014, "Feminist Theory: Its Domain and Applications," Brisolara, Sharon, Denise Seigart and Saumitra SenGupta eds., *Feminist Evaluation and Research: Theory and Practice*, The Guilford Press, 3-41.
- ⑫ Frost, Samantha, 2011, "The Implications of the New Materialisms for Feminist Epistemology," Heidi E. Grasswick ed., *Feminist Epistemology and Philosophy of Science: Power in Knowledge*, Springer: 69-83.

- ⑬ Schuster, Julia, 2021, "A Lesson from 'Cologne' on Intersectionality: Strengthening Feminist Arguments against Right-Wing Co-Option," *Feminist Theory*, SAGE Publications, 22(1): 23-42.
- ⑭ Ramazanoglu, Caroline and Janet Holland, 2002, "Escape from Epistemology? The Impact of Postmodern Thought on Feminist Methodology", *Feminist Methodology: Challenges and Choices*, SAGE Publications, 41-82.
- ⑮ Clegg, Sue, 2020, "Agency and Ontology Within Intersectional Analysis," Van Ingen, Michiel, Steph Grohmann, and Lena Gunnarsson eds., *Critical Realism, Feminism, and Gender: A Reader*, New York: Routledge, 163-179.
- ⑯ Ramazanoglu, Caroline and Janet Holland, 2002, "From Truth/Reality to Knowledge/Power: Taking a Feminist Standpoint", *Feminist Methodology: Challenges and Choices*, SAGE Publications, 81-101.
- ⑰ Grasswick, Heidi E., 2011, "Introduction: Feminist Epistemology and Philosophy of Science in the Twenty-First Century", Heidi E. Grasswick ed., *Feminist Epistemology and Philosophy of Science: Power in Knowledge*, Springer, xiii-xxx.
- ⑱ Bilge, Sirma, 2013, "Intersectionality Undone: Saving Intersectionality from Feminist Intersectionality Studies," *Du Bois Review*, 10(2): 405-425.

### そのほかの参考文献

- Anderson, Elizabeth, 1995, "Knowledge, Human Interests, and Objectivity in Feminist Epistemology," *Philosophical Topics*, 23(2): 27-58.
- Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York & London: Routledge. (竹村和子訳, 1999, 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.)
- Collins, Patricia Hill and Sirma Bilge, 2016, *Intersectionality (Key Concepts)*, Cambridge: Polity Press. (下地ローレンス吉孝監訳／小原理乃訳, 2021, 『インターセクショナルリティ』人文書院.)
- Crenshaw, Kimberle, 1989, "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics," *University of Chicago Legal Forum*, 140: 139-167.
- DuBois, William Edward Burghardt, 1983, "Passionate Scholarship: Notes on Values, Knowing and Method in Social Science," G. Bowles and R. D. Klein eds., *Theories of Women's Studies*, 105-116, Boston: Routledge & Kegan Paul.
- Grasswick, Heidi, 2008, "Feminist Social Epistemology," <http://plato.stanford.edu/archives/fall2008/entries/feminist-social-epistemology/>.
- Haraway, Donna, 1991, *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*, Routledge.



- Harding, Sandra, 1986, *The Science Question in Feminism*, Cornell University Press.
- , 1987, “Introduction: Is There a Feminist Method?” Sandra Harding ed.,  
*Feminism and Methodology: Social Science Issues*, Milton Keynes: Open University Press, 1-14.
- Marx, Karl, 1976, *Capital. Vol. I*, Harmondsworth: Penguin.
- 二瓶真理子, 2020, 「フェミニスト経験主義における価値・事実ホーリズムの批判的検討」『東北哲学会年報』36: 15-28.
- , 2021, 「科学における価値と客観性に対するフェミニスト科学哲学のアプローチ——フェミニスト経験主義とフェミニストスタンドポイントの展開」『松山大学論集』33(1): 91-112.
- 野村康, 2017, 『社会科学の考え方』名古屋大学出版会.
- 佐藤春吉, 2016, 「産業社会論集『批判的実在論特集』編纂にあたって」『産業社会論集』立命館大学産業社会学部, 51(4): 83-91.
- Van Ingen, Michiel, Steph Grohmann, and Lena Gunnarsson eds., 2020, *Critical Realism, Feminism, and Gender: A Reader*, New York: Routledge.
- 上野千鶴子・蘭信三・平井和子編, 2018, 『戦争と性暴力の比較史へ向けて』岩波書店.
- 山森亮, 2014, 「ポスト構造主義 vs.社会的存在論? ——フェミニスト経済学の哲学的基礎をめぐって」『季刊経済理論』経済理論学会, 53: 3-36.